

H. J. R. Bussey 著
「Familial Polyposis Coli」

東京大学医学部第1外科
武 藤 徹 一 郎

このモノグラフの内容を紹介するに先立って年余を St. Mark's 病院で共に生活した者として著者 Dr. Bussey (バッシー) の紹介をしておきたい。彼は17歳でカレッジを卒業すると直ちに St. Mark's 病院の Dr. Dukes の下に勤務して以来50年同病院に勤務している同病院のエンサイクロペディア的人物である。Non-medical man であるが、Dr. Dukes の下で標本作りからはじめて、病理組織診断学も習得し、大腸癌、大腸ポリープの研究を続けてきた。St. Mark's 病院から出されるあの素晴らしいデータ者のほとんどすべては Dr. Bussey の詳細な記録に負うところが大きいのである。Dr. Dukes と共に最初にはじめた仕事が familial polyposis に関するものであり、以来50年間コツコツと

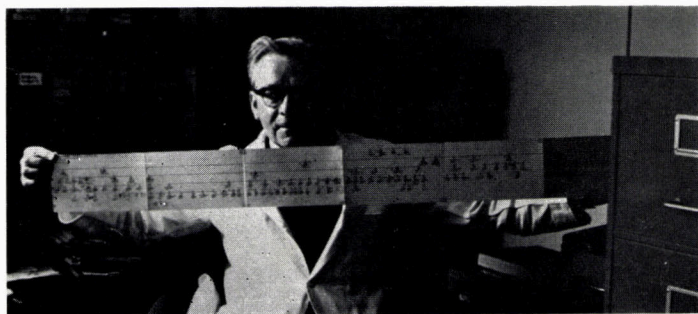
自ら集め分析した研究成果によって1970年、Lodon 大学の PH.D. を取得した。そしてその50年間の功績に対して女王よりの O. B. E. (The Order of British Empire) 称号が授与された。

本書は著者50年にわたる life work をまとめたものである。衆知のように、1952年 Dukes によって familial polyposis の臨床病理学的概念が確立されたのであるが、その骨子となったのは1925年 Lockhart-Mummery によって発表された3家系を中心とする St. Mark's Hospital Polyposis Register であった。本書にはこの病院に登録された294家系、617例の患者の中で、St. Mark's 病院で手術された170例を中心とした統計的分析、臨床病理学的分析が詳細に記載されている。患者の性差、

年齢分布からはじまって腺癌の分布、大きさなど、われわれの知りたい全ての情報が示されている。いわゆる non-familial type の polyposis に対する明確な解答も出されているし、20~30個の multiple adenomas の例の位置づけも明かにされている。病理学的事項については adenoma formation の初期像および癌と familial polyposis についての関係に多くの紙面が割かれている。ここに示されている統計的数字から、われわれはどれほど恩恵を蒙るか知れないだろう。Familial polyposis の natural course, 治療の結果、残存直腸における癌発生の risk についても、息の長い経過観察の結果が示されており大変参考になる。合併病変の中に胃疾患が含まれてはいないが、これは将来日本の研究成果が取り入れられることになるう。

本文は100頁に満たない小冊子ではあるが、familial polyposis に関するほとんどすべての解答が記載されており、消化器を専攻する臨床家、病理学者にあまねく推奨できる本である。紙面が上質でないために写真が多少不鮮明ではあるが、それによって本書の価値が下がることはない。むしろ、著者の地味な性格がここにも現われているような気がする。

☆ ☆ ☆



カードをはり合わせた手作りの Pedigree を示す著者 Dr. Bussey.

104 pp. 64 figs. 1975 ￥4,400
The Johns Hopkins University
Press 医学書院洋書部取扱い